

福井の幕末明治 歴史秘話

<第13号>

平成28年7月15日発行

幕末福井藩の明君、松平春嶽公の先進性 ～自転車とりんご～

今回は、幕末福井藩の明君、松平春嶽にまつわる“初めて”の記録に迫ります。

福井藩政資料や越前松平家・福井藩校に伝来した書籍など、一万点を超える資料群からなる「松平文庫（松平宗紀氏蔵・福井県立図書館寄託）」の「御用日記」をひも解くと、文久2年（1862年）2月6日に、“自転車”に関する記述が出てきます。

「佐々木権六がピラスビイデ独自行車の組立てを行い、側近の中根雪江も立ち会う中、馬場で試乗した。春嶽が“ピラスビイデ独自行車”という自転車に乗ったとの記載で海外から伝来した自転車に日本で初めて試乗した記録とされています。春嶽は相当気に入って、その後もたびたび試乗し、夫人勇姫を誘った記録も残っています。

※“ピラスビイデ”は、フランス語で速い乗り物を意味する“ペロシビード”がなまった言葉とされる。

自転車（実際は、三輪自転車で横浜で荷揚げされたと言われる。）を組み立てたのは、福井藩士の佐々木権六（長淳）で、権六は、自転車以外にも、洋式の鉄砲や火薬、帆船などの建造に携わり、モノづくりの分野で活躍しました。由利公正とともに武器・弾薬製造の責任者となり、分業して職工の熟練を図るなど効率化により製造費を削減したほか、新政府で製糸・紡績業の発展に尽力したことで知られる人物です。



松平春嶽



佐々木権六（長淳）

また、春嶽はりんごの栽培にも関わっています。文久2年（1862年）、春嶽はアメリカからりんごの苗木を取り寄せ、それを江戸巢鴨の越前邸に植えました。その後、慶応2年（1866年）に、津軽の旅籠屋 平野慶太郎氏が、春嶽のりんごの枝を接木した苗木2本を江戸の植木屋から買い求め、津軽に持ち帰り植樹しました。これが、青森のりんご栽培の始まりと言われます。

平野家は、この苗木でりんご栽培に取り組み、りんごは、この後青森県の特産品に発展しました。平野家では、「りんごの父」として高さ40cmの春嶽公の像を作り、昭和31年（1956年）には、青森りんご栽培90年を記念した式典で盛大に披露したということです（像は今も平野家にあります）。

現在の「ふじ」や「つがる」など国産の様々な品種の先祖は、明治4年（1871年）、北海道開拓使次官の黒田清隆がアメリカから持ち帰った苗木（「紅玉」や「国光」など）で、春嶽が取り寄せた苗木ではありませんが、日本における西洋りんごの栽培史に、春嶽の名はしっかり刻まれているのです。

「幕末の四賢侯」と呼ばれ、「明治」の元号を提案したとも言われる春嶽。先進的な考え方で新しいものを取り込み、挑戦する生き方は、二つの“日本で初めて”にも窺い知ることができます。

～幕末ふくい歴史紀行～ [福井神社]

・幕末四賢侯の一人、福井藩主松平春嶽を祀る福井神社。戦災後、福井大学工学部の設計により再建され、一般の神社とは異なる特徴的な外観を持っています。拝殿の左手には、椅子に腰掛けた春嶽の像が鎮座しています。

住所：福井市大手3-16-1（福井駅西口から徒歩9分）



福井神社

★お知らせ シンポジウム「幕末明治を福井から描く」を開催します！

・7月31日（日）、ハピリンホール（福井市中央1丁目）で開催（13:30～15:20）

・ドラマ制作者や時代考証の専門家、歴史家等を迎え開催。NHK大河ドラマのディレクターや時代考証を担当した専門家が、幕末明治という激動の時代を福井から描くドラマの魅力を語ります。